ついに週１回インスリン登場！

岩見沢市医師会
よしむら糖尿病クリニック
吉村　治彦（よしむら　はるひこ）

私は、自他とも認める糖尿病マニアです。

もしかしたら糖尿病オタクなのかもしれません。

昔から糖尿病薬の使い方やどんな食事をすると血糖値が上がりにくいとか、体重が増えにくいなど考えるのが大好きです。早いもので糖尿病を専門的に診察するようになって30年が過ぎました。今でも幸いなことに新薬が登場してうれしく思います。

本年１月末に週１回のインスリンが発売されました。私が医師を始めたころは１日１回のインスリンもなかったので驚くべき進歩だと思います。特に週１回のインスリンの登場は私の想像を超えるものでした。

発売されるとは全く考えていませんでした。

昔からよくインスリン投与を週１回にできたらいいねと話をしていましたが、まさか現実になるとは思いませんでした。この週１回にインスリンの上手な使い方を考えていくのが私たち糖尿病専門医の使命かもしれません。

それにしてもノボノルディスクファーマ株式会社の薬剤開発の技術力には驚かされます。数年前になりましたが経口投与が不可能と思われていたGLP-1受容体作動薬の経口薬を発売しています。

この薬の発売は注射薬に抵抗がある患者さんに大きな恩恵をもたらしたと思います。この技術があれば経口インスリンを作ることは可能と思われますが、GLP-1作動薬と異なりインスリンの場合は吸収率に差が大きいと低血糖のリスクもあるため同じ仕組みでは難しいと思われます。

私は今年59歳になります。あと20年元気に糖尿病診療を続けられたらと思っています。それまでにまた信じられない糖尿病治療薬が登場することを期待しながら、糖尿病診療を続けていきたいと思います。

最後にこの週１回のインスリン『アウィクリ』は、まだ使い方が確立していないので使うときは注意してください。

１日１回のインスリンと異なり１回に７倍量のインスリン投与が必要であり、さらに調整できるインスリン量が10単位ごとになっています。細やかなインスリン治療調整が必要な時は、毎日投与のインスリン製剤への変更が必要です。また、空腹時血糖をどのくらいまで下げていいのかも不明なため現時点では150mg/dl程度までがいいのかもしれません。

経済的な問題もありますが、最新の糖尿病薬を使いながら、元気で健康な糖尿病患者さんを少しでも増やしていけたらと思います。

風と共に去りぬ

根室市外三郡医師会
町立別海病院
山内　修（やまうち　おさむ）

不朽の名作「風と共に去りぬ」は、私の洋画マイ・ベスト５に入っています。そして昨年（2023）は、日本の〈タラ〉に行ってきました。

①映画「風と共に去りぬ」(1939)

Ｍ・ミッチェルの原作を映画製作者セルズニックが、３時間42分のカラー超大作として完成させました。公開されると各方面で絶賛されて、アカデミー作品賞では、「オズの魔法使」「駅馬車」を抑えての受賞。主演女優賞はＶ・リーでした。

当初、主演女優が決まっていない状態で、「風と共に去りぬ」の撮影が始まりました。そこに英国の有名男優のＬ・オリヴィエが、当時25歳のリーを連れて見学に行きます。製作者のセルズニックは後に、「彼女を一目見た時に、私が考えていたＳ・オハラそのままだった」と語っています。

この時、リーは弁護士の夫との間に一児の母、オリヴィエも女優の妻との間に一児の父、つまりW不倫中だったのです。その後二人は1940年に結婚でき、リーは「欲望という名の電車」(1951) で２度目のアカデミー主演女優賞を獲得します。

しかし1953年に、撮影先の印度で精神状態の悪化により倒れ、倫敦の病院に運ばれて入院。1960年にはオリヴィエと離婚。それからの彼女は結婚をせずに、後年には肺結核が再燃し1967年に死去します、53歳没。葬儀委員長はオリヴィエでした。

②TVドラマ「スカーレット」(1994)

「風と共に去りぬ」の続編の映像化です。原作はＡ・リプリーで、1991年に出版されました。私は1995年発売のLDの４枚組セットを、中古店にて8,156円で買いました。Ｒ・バトラー役を４代目「007」Ｊ・ボンドのＴ・ダルトンが演じています。この映像については、画質の良いBDでの再発売を希望しています。

③日本の〈タラ〉

「風と共に去りぬ」は米国南部の〈タラ〉という土地から始まります。また、主人公Ｓ・オハラが、炎上するアトランタ陥落から命からがら逃げた後に、「必ず生き延びて再興を誓う」のも〈タラ〉。

何と、日本にも〈タラ〉がありました。佐賀県藤津郡〈太良〉町です。有明海に面していて、竹崎カニが美味しい静かな温泉町でした。町内に大魚神社の海中鳥居や、近くに日本三大稲荷の一つとされる祐徳稲荷神社もあります（佐賀県鹿島市）。

その〈太良〉でＶ・リーを偲んできました。